

# RESIDENTIAL ARCHITECTURE AWARD 2020

## 住宅建築賞2020入賞作品集



### 住宅建築賞2020

主催 一般社団法人 東京建築士会

企画 東京建築士会 事業委員会

後援予定 公益社団法人 日本建築士会連合会  
一般社団法人 東京都建築士事務所協会  
一般社団法人 日本建築学会 関東支部  
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部  
株式会社 新建築社  
株式会社 エクスナレッジ

協賛 株式会社 建築資料研究社 日建学院  
株式会社 総合資格

協力 リビングデザインセンターOZONE  
工学院大学 木下庸子研究室

### お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会  
中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階  
tel.03-3527-3100 fax.03-3527-3101  
[E-mail] jks@tokyokenchikushikai.or.jp  
www.tokyokenchikushikai.or.jp

### 住宅建築賞 入賞者

#### 住宅建築賞 金賞

小坂怜 + 森中康彰

#### 住宅建築賞

山田紗子

白石圭 + 中島壯 + 橋本圭央

古澤大輔 + 坪井宏嗣

#### 住宅建築賞 優秀賞

荒木源希 + 佐々木高之 + 佐々木珠穂 + 青木昂志良

# 住宅建築賞 入賞作品

2020年 | 一般社団法人 東京建築士会

## 応募主旨

審査員長 乾 久美子

### 【住宅から見出す希望】

住宅は、住まい手が、環境を選びとり、建て、住もうといった一連の行為の総体として現れるものだと思います。それは生きることと同義となるぐらい迫力のあるものだと思います。また、建てることは希望をつかみとるような行為なのかと思います。

しかし、近代を経て、建てることが産業の世界へと取り込まれてからというものの、建てるここと生きることのつながりは薄くなり、建てるこことは、車やテレビなどの消費財を選ぶことあまり変わらなくなってしまったように思います。施主が住宅に希望するものは先回りして、用意されたメニューから選ぶようなものへと変質してしまっているわけです。

東京建築士会の住宅建築賞の応募作品に確認したいのは、施主が建築家と共に、どのような希望を見出し、それを住宅へと定着していくかです。住宅をつくることを通して、生きることの迫力や厚み、ユニークさが、現代においてどのように達成されているのかを見たいと思っています。住宅を通して発見される私たちが生きる世界の魅力とはどういうものなのでしょうか。骨太な作品に出会えることを楽しみにしています。

## 応募要項

- (1) 上記の主旨にかなうもの
- (2) 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- (3) 原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
- (4) 雑誌等に発表したものでもよい
- (5) 建築物の所在地は原則として1都3県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)とする
- (6) 応募の点数は自由とする
- (7) 審査員の関与した作品は応募できない
- (8) 応募者は予め建築主(所有者)・施工者の了解を得て応募すること

## 応募要件

賞の対象	設計者・建築主・施工者の3者を顕彰するものとする。
応募資格	応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者 登録料 本会正会員:無料(申込時に入会した方を含む) 他道府県 建築士会 正会員:1点につき5,000円(作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください)
提出期限	2020年1月31日(金)窓口へ直接お持込みの場合は、1月31日(金)17:00迄とする。郵送の場合は、1月31日の消印有効。

## 提出先

一般社団法人東京建築士会 住宅建築賞係

〒103-0006 中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階 TEL 03-3527-3100

申込書及び本会指定A2版台紙

※第一次審査を通過した場合、建築士免許コピー及び検査済証のコピー(確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章)の提出を求めることがある  
図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。  
専用申込フォーム(右記QRコード)またはE-mailにてご請求ください。E-mailの場合、①件名を住宅建築賞申込希望、②氏名、③送付先、④連絡先、⑤所属建築士会名と会員番号等を明記のうえ、送信ください。なお、事務処理の迅速化を図るために、宅配便着払いの旨お書き添えください。(E-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp)



## 審査員

審査員長 乾 久美子

審査員 青木 淳／中川エリカ／長谷川 豪／福島加津也

## 審査

| 1 | 第一次審査(書類審査)に通過したものは原則として現地審査する。

| 2 | 入賞発表 2020年4月中旬

- ・審査結果については、応募者に直接通知する
- ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金  
| 1 | 入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。  
■ 住宅建築賞 70,000円 ■ 住宅建築賞金賞 150,000円

| 2 | 建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。  
| 3 | 表彰式:本会定時総会の席上(6月上旬開催予定)

応募図面の取扱い  
| 1 | 応募図面の公表及び出版の権利は主催者が保有する。

| 2 | 入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展(公開展示:7月開催)の予定がある。

| 3 | 入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰作候補作品として、推薦することがある。

| 4 | 応募作品は返却しない。

## 審査結果(2020年 住宅建築賞)

応募点数 74点 住宅建築賞 入賞4点(内金賞1点)、奨励賞1点

住宅建築賞 (受付順)	武蔵野の戸建 (東京都)	■設計者:小坂怜+森中康彰(一級建築士事務所小坂森中建築) ■建築主:坂井啓吾+坂井むつみ ■施工者:株式会社山菱工務店(建物構造:木造)
	daita2019 (東京都)	■設計者:山田紗子(山田紗子建築設計事務所) ■建築主:山田良明 ■施工者:株式会社ビルドラゴ(建物構造:木造軸組構造(外部のみ鉄骨造))
	北小金のいえ (千葉県)	■設計者:白石圭(S設計室)+中島社(中島社設計一級建築士事務所)+橋本圭央(日本福祉大学) ■建築主:白石明子 ■施工者:S設計室(建物構造:木造在来工法)
	古澤邸 (東京都)	■設計者:古澤大輔(リライト_D/日本大学理工学部)+坪井宏嗣(株式会社坪井宏嗣構造設計事務所) ■建築主:古澤大輔 ■施工者:株式会社TH-1(建物構造:RC造(純ラーメン構造))
	朝霞の3棟再整備計画 (埼玉県)	■設計者:荒木源希+佐々木高之+佐々木珠穂+青木昂志良(株式会社アラキ+ササキアーキテクツ) ■建築主:石嶋幹夫 ■施工者:トータルリフォーム丸川株式会社(建物構造:木造一部S造)

## 参考資料

一次審査結果 2020年2月16日(日)実施。応募作品74点より、1人6点~10点を投票(審査員5名)

### 【一次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号									
乾	3	14	20	24	27	37	44	60	65	73
青木	1	24	28	44	51	57	60	71	—	—
中川	1	3	20	23	24	27	51	60	61	71
長谷川	14	23	24	60	73	74	—	—	—	—
福島	5	11	37	49	60	67	74	—	—	—

### 【二次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号				
乾	3	14	24	44	60
青木	14	24	44	57	60
中川	3	24	51	60	71
長谷川	14	24	60	71	73
福島	14	24	60	73	74

### 一次投票結果 (計22点)

獲得票数	作品番号	合計
5 票	60	1作品
4 票	24	1作品
2 票	1、3、14、20、23、27、37、44、51、71、73、74	12作品
1 票	5、11、28、49、57、61、65、67	8作品

### 二次投票結果(下記10点より、議論) (計10点)

獲得票数	作品番号	合計
5 票	24、60	2作品
4 票	14	1作品
2 票	3、44、71、73	4作品
1 票	51、57、74	3作品

一次投票22作品より議論し、二次投票を行った。

下記5点を一次審査通過とし、  
二次(現地)審査対象とした。  
二次(現地)審査は、  
3月1日(日)に実施した。

24 60 14 44 73



一次審査風景

## 総評

乾 久美子

今年の応募総数は74作品で、去年に比較して5作品増えた。今年も二次審査日程調整の期間が短かったが、設計者と施工による厚意により全ての作品を現地審査することができた。二次審査日は、新型コロナウィルスの感染拡大防止の動きから、全国規模で様々な会合やイベントが中止されはじめた時期である。審査当日は手を消毒してから審査物件に入らせていただいた。最終的な金賞の議論の俎上に登ったのは「古澤邸」と「武藏野の戸建」である。どちらも構成や構造、ディテールの丹念な検討が抜きん出ており、完成度という点で優劣の差はないかのように感じた。

「古澤邸」は建築家の自宅で、駅前の商業地域にある狭小の敷地に建つ立体的な住まいであった。転用を研究する氏の作品らしく、スケルトン&インフィルを前提とする計画だが、これまでとは違う次世代的な試みは、スケルトンがインフィルを突き放すように存在することであろう。菊竹清訓の東光園を彷彿とさせるアクロバティックな構造体が、プランニングと無関係に家の中心に鎮座している。そこにサッシュや外壁などの二次的な部材を追加することで住宅にしているのだが、構造体の強さと住宅としてのしつらえとの間にギャップがあり、住宅としての姿がかりそめのものでしかない。日常的な転用ともいえる「家びらき」を積極的に行なっていることも興味深いもので、遺跡のような存在としての構造を使いこなすことからはじまる住宅を、脱・住宅的な使われ方へともすびつけようとする計画／生活の実践に、現代的な意味を感じた。

しかし、スケルトンである構造がもつ強い形式性は、計画／生活の実践とは別のジャンルの問題として存在するように見えた。梁と床板をずらすことや、ピン角でスラブ同士を接合させるなど、形式のための形式とでも言えばいいのか、ゲーム性をおびた幾何学的な論理でつくられていたからだろう。正方形の平面形があてはまる敷地を探していたという建築家の言葉に象徴されるように、ここにおける形式は抽象的なものであり、生活や環境から切り離されている。遺跡のような存在がそうした日常から距離を置くものとしてつくるとしたとしても、幾何学的な形式の物質化だけがその選択肢なのだろうかという疑問が残った。



一次審査風景



## 作品講評

2020年住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞

武藏野の戸建

設計者

小坂怜+森中康彰 (一級建築士事務所小坂森中建築)

講評者

福島加津也

対する「武藏野の戸建」における形式はきわめて弱いものとして存在していた。室内で展開しているのは少しだけ歪んだ9つのグリッドと床架構の自由なレベル設定である。それらは、製材の寸法から生まれる自然な架構に始まりを求めるからか恣意性がみえない。さらに、動線や家具、家電といった要素を無理なくおさめつつ、無駄のない寸法の設定により、日常の暮らしがつましいながらも豊かに展開している。それらは生活環境として郊外に同化しきっているという意見があつてもおかしくない。こうした建築をもって形式を語るべきかと躊躇するほどのさりげなさだ。また、そこで目指されたのは、素朴な架構の検討ではないかという指摘もできるだろう。しかし、木造とか暮らしなどといった物質の問題と、建築的な構成とが精度高く調停されているといえぱいいだろうか。建築の実践でしか得ることのできない、物質性をともなった形式が獲得されている。

また小さくフレンドリーな外観が、周辺の雰囲気や文化的な価値を再評価するきっかけを生んでおり、住宅でありながらも都市計画的な視点によってデザインするという意図が成功しているような印象を受ける。土間としてのキッチンや、道路に面した窓、玉川上水に向かう縁側などの窓は郊外のおおらかな環境に応答した結果の要素と思われるが、それが家族だけの暮らしにとどまらないおおらかな使われ方を促していくきっかけになっているよう見えた。これらの要素は、環境から切り離して発想されたものではないだろう。人類学の参与観察にも近いのかもしれないが、建築家がプロジェクトを通してみずからを変化させながら発見していく形式だといえないか。そこに施主や施工者などと共にあらわれているように感じたからである。施主や環境と共につくることの中に、建築の希望を感じた。

このように両者は対照的であった。かたやアクロバティックなRC、かたや慎ましい木造、環境も周密な都市部とおおらかな郊外というように。しかし、それ以上に明確なのは形式へとむかう姿勢の違いである。「古澤邸」から醸し出される熱量に圧倒されつゝも、「武藏野の戸建」にみられる物質性をともなう生きた形式の可能性に軍配をあげた。そこに、建築のこれから作り方があらわれているように感じたからである。施主や環境と共につくることの中に、建築の希望を感じた。

外観は周辺の住宅よりもボリュームが抑えられて控えめに見えるが、近づくにつれていくつか不思議なことに気が付く。前面の庇は側面にまで回り込み、しかも切妻になって途中で切断されている。正方形の平面は角度がわずかに振れていて、北側の隅切りはRCスラブが切断前の正方形に残されている。庇はかつてここに小さな小屋があったかもしれないという幻に、RCスラブは正方形がプランの原型であるという徵に見える。それは、社会の意味を建築の形で表し、私たちの心を揺さぶる。

内部空間は、柱梁の軸組だけでなく、間柱や構造用合板、プレースも見せている。それは、構造というよりも工法の表しであり、どのような素材がどのような技術でできているかということが理解できる。住宅の機能がさらに断片化したような小さな空間が、吹き抜けというよりは透間のような余白によって立体的につながり、柔らかい全体像を獲得している。工法の表しや空間の立体構成、さらには表面の塗装の塗分けなどには、身の丈に合った心地よさがある。それは成熟した現代社会の空気感でもあるのだろう。しかし、このような凡庸な解説を超えて、私はそこに偏執的でないさを感じた。



しかし、提出資料や現地審査での建築家の説明は、ほとんどが周辺環境とそれに対する建築的対応のことであった。もし本当にこの住宅がそれだけだったら、金賞には値しなかったんだろう。私が評価したのは、説明されることのなかった建築家の強い意志である。そこに、これからの住宅の「希望」を見たような気がした。そう言ったら建築家は怒るだろうか。

住宅建築賞 daita2019

設計者 山田紗子(山田紗子建築設計事務所)

講評者 中川エリカ

もともと公園の淵で借景を目論むことができそうな敷地を探したが、どうにも予算が合わず、最終的に手にした敷地が変形した三叉路沿いだったのだという。結果、建物の形はいびつになり、当初求めていた借景のイメージの名残だという、ブッシュのような単管ファサードは、家と道の距離を調停するボリュームとなった。同時に、テラスでありながらアプローチでもある。一次審査では、材料の過剰な多さ、組み立ての合理性のわからなさから、ブッシュは好奇心をそそる野性的な印象だったが、現地を訪れるときのほか、建築本体に肉薄する凶暴な存在ではなく、ウチはウチ、ソトはソトという、どこかよそよそしい隣人のように、建築体験の要素としては少し主体性と連続性に欠けた。借景のボリュームというイメージのまま予定調和的に建ち現れたものの、現実に現れてからはまだ新たな何かをもたらせていない、と言っても良い。また、内部の階高設定や階段の角度、逆梁の配置や開き戸のサイズに設計者の独特な個性を感じたものの、ここでも決定的な効果、しかも、今まで私たちが知らなかった効果には届いていないように思えた。そのことが、まだ言葉にさえできない新鮮な感覚を審査員と一緒に予感させながらも、金賞には届かなかった理由だろう。



住宅建築賞 古澤邸 設計者 古澤大輔(ライト.D／日本大学理工学部) + 坪井宏嗣(株式会社坪井宏嗣構造設計事務所)

講評者 長谷川 豪

敷地の中央に立ち上げた十字形に組んだコンクリートフレーム。四象限のマス目を取り合うように入るスラブ。階段のディテールはフロアごとに異なり、外周には極薄のコンクリート腰壁。古澤邸に身を置いて印象に残ったのは、具体的なモノを見ているのに、何かとても抽象的だったことだ。

古澤さんや僕が建築を学び始めた90年代後半は、敷地やプログラムなどの設計条件を明瞭な図式で解くダイアグラムのような建築表現が勃興。そうした建築にはゲームをクリアするのに似た快楽があり、その後の建築表現に大きな影響を与えた。古澤邸は90年代の図式建築とは別物だが、設計ゲーム的であることが符合する。「正方形の敷地を探すことから設計がスタートした」という話に驚いたが、既にそこにゲーム性の強さが窺える。条件を鮮やかに解き、一つ一つのディテールを詰めていく楽しさ。僕たちは設計のトレーニングをしているのでそれを理解できるし、楽しい。でも逆に言えば、それは閉じた世界のなかの「すでに知っている楽しさ」かもしれない。重要なのは設計ゲームの上手い下手ではなく、そのゲームがどんなふうに、現実を、建築を、「知らなかったもの」にアップデートできるか、ではないか。それが見えたなら、古澤邸は文句なしの名作だった。



住宅建築賞 北小金のいえ

設計者 白石圭(S設計室) + 中島壮(中島壮設計一級建築士事務所) + 橋本圭央(日本福祉大学)

講評者 青木 淳

形態操作のための形態操作ではない。結果としてできあがった形態それぞれに理由がある。屋根の平面形は矩形として敷地の向きにあわせ、それをOMソーラーで最大の集熱が得られる方向性で折る。集熱面となる屋根の傾きも同じ論理から導く。やはり矩形平面の建物本体を平面的に振り、屋根面の矩形で切断する。切断した面を窓のない壁とし、切断しない面に開口を設けると、その先に屋根の懸かる三角形平面の軒先が生まれる。その結果、都合4つの軒先ができるが、そのそれぞれに機能を割り当てる。玄関のため、物干のため、庭仕事のため、居間のため、という、異なる4つの機能である。逆に言えば、それらの軒先を生み出すために、建物を振ったということもできる。つまりここには、形態操作が機能を誘導し、機能操作が形態を誘導するという、論理の循環がある。論理はどこからはじめてよく、ただしその論理はどうやっても一巡して戻ってくる。建築の外の論理に支えられるのではない、オートポイエーシス的に自律した論理でつくられるということは、良い建築であるための十分条件であり、かつそれがじつにチャーミングな姿として結実したこと、この建築のすばらしさがある。



異なる角度から設計を進める3人のコラボレーションということも、ほとんどセルフビルトと言つていい域にまで達する分離発注で施工されたことも、すばらしい。

それらに加えて、プロジェクト全体をある方向に引っ張っていく力—私たちがこれまで思いつかなかったが、それを見てなるほどと思えてくる—があってほしかった、というのは「ないものねだり」なのかもしれない。それがないからこそ、この建築は清々しい、とも言えるのだから。

住宅建築賞 奨励賞 朝霞の3棟再整備計画 設計者 荒木源希+佐々木高之+佐々木珠穂+青木昂志良(株式会社アラキ+ササキアーキテクツ)

講評者 乾 久美子

「朝霞の3棟再整備計画」は親族の遺品を軸とした家びらきや、社員寮としての機能や、将来にむけてのバリアフリー改修とが混在した複雑なプロジェクトである。施主のユニークな要望が推進力になり、大家族の住宅でも、核家族の住宅でも、お一人様の住宅でもない、脱・住宅とでもいべき姿に向かって、今後も継続的に整備が続けられるという。博物館にはいるほどでもない、しかし価値ある骨董品は日本中の家屋に埋蔵されていると聞く。それらを集め地域全体のコミュニティ・アーカイブのような活動へと広がっていくと面白いはずだ。そのきっかけとなりそうな、興味深いプログラムを内包したプロジェクトであった。ただ、施主による現代的ともいえる試みに建築家のほうがうまく反応していないように見えた。プロジェクトに埋め込まれた潜在的な可能性に応答した建築の開発が必要なのかもしれない。建築としての熟度に物足りなさがあると判断し、残念ながら奨励賞とした。







**朝霞の3棟再整備計画** -[新築] [改修] [増築] を織り交ぜた敷地の更新-

一人暮らしの施主は、故人(家族)の気配を感じながら、人の集う場所を望んでいた。我々は蔵を中心とした、ひと繋がりの建築群を提案し、故人の趣味や家財を整理、収納、展示できる可能性を考えた。まず「倉庫併用住宅」を新築し、倉庫に大きな収納を確保した。「蔵」では光と風の環境を改善することで、人の滞在する居室へと改修していく。「母屋」では軒を解体し、聞いたデッキとした。最後に渡り廊下を増築し、時代の異なる3棟を繋いだ。棟下空間・デッキ・東屋などの居場所と家族の物々が敷地に溶みだすことで、生活が垣間見え、隣人との会話が自然と増えた。物と建築を通して、人との接点を外から取り戻しながら、敷地の更新を続けている。








渡り廊下(増築)  
倉庫併用住宅(新築)  
倉庫1階 外廊ギャラリー(新築)  
母屋の新規通用口と新設デッキ(改修)  
庭を眺める東屋(改修)

母屋から倉庫2階、蔵へとアクセスできる。普段は布団干渡り廊下と繋がるピロティ。突き当たりには、現在テーブル通用口は3棟の移動距離を縮め、敷地西側の利用を促す。東の庭に対して掛け出し窓と、石デッキ、バーゴラを設置し、場として使われている。夜は月見場所として使う。  
セットが置かれ、映画ポスターのギャラリーを計画中。  
閉じていた扉は切り下げ、見通しの良い花見会場とした。  
孤立していた蔵と母屋を繋いだ。夏は蚊帳を吊るして過ごす。

倉庫併用住宅(新築)  
2F 白壁と蔵の要素を取り込んだ革木屋根  
2F 蔵の大谷石を背景として利用する  
石蔵(改修)  
2F 内壁を削り直し居室として仕上げる  
蔵の内壁を削り直し居室として仕上げる  
新築 改修 増築





## 住宅建築賞受賞者プロフィール

### 武藏野の戸建



小坂 恼

(写真:左)

Rei Kosaka

森中 康彰

(写真:右)

Yasuaki Morinaka

1984年：青森県生まれ

2007年：東京理科大学工学部建築学科卒業

2007～2010年：アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所

2014～2017年：乾久美子建築設計事務所

2018年：一級建築士事務所小坂森中建築設立

1984年：石川県生まれ

2011年：東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修了

2008年：スイス連邦工科大学派遣交換留学奖学金

2011～2018年：乾久美子建築設計事務所

2018年：一級建築士事務所小坂森中建築設立

### daita2019



山田 紗子

Suzuko Yamada

1984年：東京都生まれ

2007年：慶應義塾大学環境情報学部卒業

2007～2011年：藤本壯介建築設計事務所勤務

2013年：東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了

2013年：山田紗子建築設計事務所設立

2013年：横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手、非常勤講師

2017年～：明治大学理工学部建築学科、

ICSカレッジオブアーツ非常勤講師

### 北小金のいえ



白石 圭

Kei Shiraishi

1977年：千葉県生まれ

2002年：東京藝術大学美術学部建築科卒業

2008年：クランブルックアカデミー建築科修了

2009～2011年：N設計室

2012年～：S設計室開設



中島 壮

Takeshi Nakashima

1969年：福岡県生まれ

1997年：東京藝術大学美術学部建築科卒業

1999年：坂牛卓一級建築士事務所

2018年：中島壮設計一級建築士事務所



橋本 圭央

Tamao Hashimoto

1976年：高知県生まれ

2001年：東京藝術大学美術学部建築科卒業

2008年：AAスクール Diploma Program 修了

2010年～：東京藝術大学教育研究助手・助教、現在非常勤講師

2018年～：日本福祉大学助教

## 古澤 邸



### 古澤 大輔

Daisuke Furusawa

1976年：東京都生まれ  
2000年：東京都立大学工学部建築学科卒業  
2002年：東京都立大学大学院修士課程修了  
2002年：メジロスタジオ一級建築士事務所設立  
2013年：メジロスタジオをリライト\_D(株式会社リライト建築・不動産事業部)に組織改編  
2013～2019年：日本大学理工学部建築学科助教  
2020年～：日本大学理工学部建築学科准教授



### 坪井 宏嗣

Hirotsugu Tsuboi

1976年：山形県生まれ  
2001年：東京大学工学部建築学科卒業  
2003年：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了  
2003年：佐藤淳構造設計事務所勤務  
2006年：坪井宏嗣構造設計事務所設立  
2016年：株式会社坪井宏嗣構造設計事務所設立

## 朝霞の3棟再整備計画

### 荒木 源希

(写真:右)

Motoki Araki



### 佐々木 高之

(写真:中央)

Takayuki Sasaki

1979年：東京都生まれ  
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業  
2004年：東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了  
2004～2007年：アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所勤務  
2008～2011年：アラキ+ササキアーキテクツ一級建築士事務所共同主宰  
2011年～：株式会社アラキ+ササキアーキテクツ代表取締役  
2013年～：専門学校ICSカレッジオブアーツ非常勤講師  
2015～2020年：首都大学東京(現:東京都立大学)非常勤講師

### 佐々木 珠穂

(写真:左)

Tamaho Sasaki

1978年：広島県生まれ  
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業  
2005年：イーストロンドン大学大学院ディプロマ修了  
2005～2007年：NAP建築設計事務所勤務  
2008～2011年：アラキ+ササキアーキテクツ一級建築士事務所共同主宰  
2009年～：専門学校ICSカレッジオブアーツ講師(現在、特任教授)  
2011年～：株式会社アラキ+ササキアーキテクツ代表取締役  
2012～2018年：東京大学生産技術研究所協力研究員  
2014～2019年：関東学院大学非常勤講師  
2015年～：首都大学東京(現:東京都立大学)非常勤講師  
2016～2020年：明治大学兼任講師

### 青木 昂志良

Koshiro Aoki

1979年：富山県生まれ  
2002年：東京都立大学工学部建築学科卒業  
2005年：イーストロンドン大学大学院ディプロマ修了  
2006～2008年：建築設計事務所勤務  
2008～2011年：アラキ+ササキアーキテクツ一級建築士事務所共同主宰  
2011年～：株式会社アラキ+ササキアーキテクツ代表取締役  
2015年～：千葉工業大学非常勤講師  
2015～2020年：首都大学東京(現:東京都立大学)非常勤講師  
2016年～：専門学校ICSカレッジオブアーツ非常勤講師  
2018年～：駒沢女子大学非常勤講師



1992年：神奈川県生まれ  
2014年：首都大学東京(現:東京都立大学)都市環境学部卒業  
2016年：首都大学東京(現:東京都立大学)大学院  
　　都市環境科学研究科修士課程修了  
2016年～：株式会社アラキ+ササキアーキテクツ勤務